

動詞構文ネットワークの考え方
— give, suggest の構文を事例として —

ココネ言語教育研究所

佐藤芳明

はじめに

動詞構文を学ぶ際、個々の動詞の構文をバラバラに覚えるよりも、共通の構文パターンに注目するなどして、ネットワーク的に学ぶ方が効果的であることは予測に難くない。動詞構文のネットワークを考える際には、以下の2点を考慮する必要がある。

- 1) 同一の動詞が使われる複数の構文可能性 (intra-verbal construction network)
- 2) 異なる動詞が共通して使われる構文パターン (inter-verbal construction network)

上記の1)はいわば同一動詞における「タテの構文の幅」にあたり、2)は複数の動詞にまたがる「ヨコの構文的つながり」に相当する。構文論 (Goldberg 1995 等) では、これらのうち2)に焦点をあてて議論がなされている。構文には部分の総和では解釈し得ない構文独自の意味があり、それが複数の動詞に許容されて構文ネットワークを形成していくという捉え方である。一方、上記1)については、従来あまり議論が尽くされていないように思われる。ひとつの動詞がいかなる構文の幅を有するかということについてもある程度、原理的な解明をみて、はじめて動詞構文ネットワークは、より説明力のあるものとなると思われる。その意味で、以下、ヨコの広がりのみならずタテの幅も考慮した、構文ネットワークの考え方についてみていくことにしたい。

GIVE の構文ネットワーク

GIVE を例にとれば、以下のような構文ネットワークが想定可能となる。

GIVE + A (e.g. She gave a cry.)

---「動詞 + 名詞」→ 他動詞一般

GIVE + A + to + B (e.g. He gave some money to me.)

---「動詞 + A + to + B」→ submit, contribute, devote, dedicate; say, explain, suggest, etc.

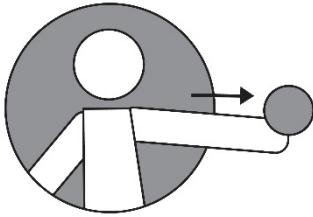
GIVE + 名詞 + 名詞 (e.g. Give me a break.)

---「動詞 + 名詞 + 名詞」→ send, lend, teach; save, deny, cost, etc.

Give において上の3つの構文(タテの構文の幅)が可能となるのはなぜか。ここには give のコア(本質的意味)が関与していると考えられる。Give のコアが<何かを自分のところから出す>と捉えられるために、以下のように構文が展開していくと考えられるのである。

GIVEのコア: 自分のところから何かを出す

give



GIVEの構文展開(タテの構文の幅)

- 1) GIVE + A (Aを出す)
- 2) GIVE + A + to + B (Aを出してBに差し向ける)
- 3) GIVE + B + A ([BがAを HAVE する状況]を生み出す)

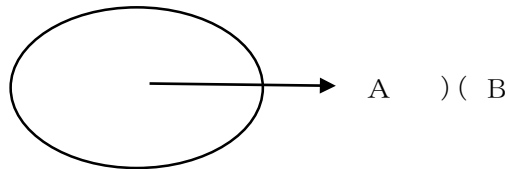
このように捉えると、2)の構文(e.g. He gave some money to me.)においてはAが「移動可能」と感じられる対象であるのに対して、3)の構文(e.g. Give me a break.)におけるBにはその制約は働かず、むしろ、「GIVE + 名詞 + 名詞」では、[名詞 HAVE 名詞]の状況を生み出すという意味あいになるという、2)と3)の構文的意味の相違も明確になる。従来の構文論では、2)と3)の構文特性の相違が明確になされていないように思われる。そのことは、上記2)の構文のみならず3)の構文をも、transfer という概念(「何かを誰かに移送する」という発想)で把握しようとするところなどに象徴される。

このタテの構文展開を踏まえて、give のそれぞれの構文パターンが、今度は、ヨコの構文的つながりを獲得していく、と捉えることが可能である。そのプロセスを経て、「動詞 + A + to + B」の構文が、contribute, devote, dedicate; say, explain, suggest などにおいても生じ、「動詞 + 名詞 + 名詞」の構文が send, lend, teach; save, deny, cost などにおいても可能となると考えられる。このとき、「GIVE + A + to + B」の構文と、「GIVE + 名詞 + 名詞」の構文の意味特性の差が明確になっていることから、それぞれから広がりを見せる構文パターン(「動詞 + A + to + B」と「動詞 + 名詞 + 名詞」)のあいだにおいても、構文的な差異が引き継がれると考えられる。つまり、「動詞 + A + to + B」の構文では、「Aを出して、Bと向き合わせる(Bに差し向ける)」という構文的意味が生じ、「動詞 + 名詞 + 名詞」の構文の場合は、動詞の対象として、[名詞 HAVE 名詞]の状況が想定されるという意味特性が認められるのである。

このように捉えると、なぜ、contribute, devote, dedicate や say, explain, suggest など、「動詞 + A + to + B」の構文は可能である一方、「動詞 + 名詞 + 名詞」の構文は受容されないかということについても説明可能となる。例えば、Donate some money to the needy で、* Donate the needy some money. とはしない。これはやはり、donate という動詞の意味用法が、上記 2 つの構文タイプのうち、「動詞 + A + to + B」においては受容されるが、「動詞 + 名詞 + 名詞」の構文タイプとは相性がよくないと

いうことを示している。つまり、「Aを出して、Bに差し向ける」という構文的意味とはかみ合うが、動詞の対象として、[名詞 HAVE 名詞]の状況が想定されるわけではない、ということの意味しているのである。「貧しい人にお金を寄付すれば、貧しい人がお金を持つ」であろうから、HAVE 状況が想定されるのではないかというのは、出来事としての事実問題を論じているのであって、英語の動詞や構文の意味を論じていることにはならない。訳語の影響を最小化すべく、視覚化して捉えてみると分かりやすい。「動詞+A+to+B」の構文は、以下のように、「Aを出して、それをBに差し向ける」という局面に焦点があてられる。この構文的意味とフィットする動詞が、その構文パターンで受容されると考えられるのである。

「動詞+A+to+B」構文のイメージ



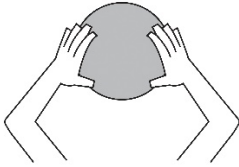
この発想は、発話動詞系の say, explain, suggest などにおいても適応可能と思われる。Say hi to your wife. の代わりに、* Say your wife hi. と言わないし、He explained the matter to us. を、* He explained us the matter. と表現することはできない。これもやはり、発話されるコトバそのものを「自分のところから出して、相手へ差し向ける」という局面に注目するからこそ起こる現象と思われるのである。

類似の意味の動詞における構文的差異

ところで、類似の意味合いをもつ動詞で一方においては可能な構文が、他方では使えないというのはいかなる理由によるものか。この問題についてもそれぞれの動詞のコアを参照することで解決の糸口をつかむことができる。動詞のコア(本質の意味)は、その動詞の構文展開の原理となる。あるいは、構文展開における制約条件となると考えられるのである。例えば、keep と hold は、have 関連の動詞として意味的にも類似している。しかし、「踊り続ける」というときに、keep dancing とは言っても hold dancing とは言わない。なぜか。Hold のコアは<一時的につかむ>というもので、典型的には手をつかっただけつかんだりおさえたりするイメージである。Could you hold my bag for a moment? のように、手をつかっただけ一時的におさえるというのが基本的イメージである。Hold your tongue. (黙れ) は比喩的だが、hold には動きがあるものが対象だとその動きを止めるといったニュアンスが生じる。一方、Keep のコアは<何かを比較的長いあいだ保つ>ということで、必ずしも手につかむイメージはなく、心理的に見張っていればよく、「維持する」「管理する」といった意味合いともつながっている。

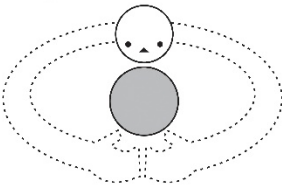
Hold のコア: 一時的に抑えておく

hold¹



Keep のコア: 比較的長いあいだ保つ

keep



Hold と keep のコアを参照すれば、なぜ、これらの意味的に類似した動詞が、「動詞+ING」という構文を一方は受容し、他方は受け入れないのか理解できるようになる。Keep の場合には比較的長いあいだある一定の状態を維持するということから、keep doing においても継続性を意味できる。一方、hold の場合には基本的に手をつかんで抑えるところから、動きのあるものについてはその動きを止めるイメージを伴う。そこで、hold doing では、動作の継続を示すことは原理的にできないということになるのである。これは、動詞のコアが構文展開上の原理(制約条件)として作用している例とみなすことができる。

構文形成(派生)のイメージ

構文の形成(派生)については、以下のように考えられる。まず、基本動詞の典型的な用法が定着して、その構文がスキーマとして抽象度を上げて図式的な意味を獲得する(構文的意味)。その構文的(図式的)意味を共有し得る動詞が今度はネットワーク化されて、構文上のカテゴリーが形成されていく。このプロセスを通じて、たとえば、「GIVE+名詞+名詞」などから「動詞+名詞+名詞」の構文(HAVE 関係を含意する構文)が、「GIVE+A+to+B」などから「動詞+A+to+B」の構文がそれぞれ派生していくと考えられる。これは構文論で議論されている点だが、上のタテの展開とヨコのつながりという観点で言えば、専ら後者に焦点化した論の展開になっており、前者の論点はいわば死角になっている。その不足を補おうとすることこそが、この小論のねらいである。

SUGGEST の構文

上の give の議論を踏まえて、今度は、suggest の構文について考えてみたい。Suggest は、動詞構文の観点から、興味深い現象がいくつかある。Suggest の構文の幅としては、以下のようなものが含まれる。

1. He suggested an idea to us.
2. I suggested going there by taxi.
3. She suggested (that) her husband quit drinking.

これら suggest の構文について、以下のような問題意識が生じ得る。1 で、*He suggested us an idea. とは言えないが、それはなぜか。2 では、不定詞を使って *I suggested to go there by taxi. とはしないが、それはなぜか。さらに 3 は、後続の that 節が「仮定法現在」の用法と呼ばれたりするが、これは何を意味しているのか。これらの間に答えるにあたっては、単に構文のヨコの広がりを考えるだけでなく、suggest のタテの構文の幅を考える必要がある。つまり、suggest の本質的意味(コア)を参照しつつ構文の幅を見直さなくてはならない。以下、suggest のコアを基にした構文展開についてみてみよう。

SUGGEST のコアと構文展開

【SUGGEST のコア：(相手に拒まれるかもしれない)アイディアを差し出す】

Suggest の構文展開(タテの構文の幅)

- 1) Suggest + A + to + B (ある案を出して相手に差し向ける)
- 2) Suggest + doing (行為をアイディアとして提案する)
- 3) Suggest + that someone (should) do (誰かが何かをすべきだ(何かをせよ)と提案する)

こうしてみると、1)～3)の構文の幅はたしかにあるものの、suggest のコアは一貫していることが確認できる。それは、「(相手に拒まれるかもしれない)アイディアを差し出す」というものである。「相手に拒まれるかもしれない」ということは、アイディアそのものを誰かに差し向けたとしても、それが相手によって have されるとは限らないということになる。これが、He suggested an idea to us. という表現が自然で、*He suggested us an idea. という構文はとらないことの原因と考えられる。これは構文タイプとしては、「give + A + to + B」と通ずるものであり、発話動詞系で言えば、say や explain と類縁関係にあるということがわかる。

また、I suggested going there by taxi. というのは、たとえば、How about going there by taxi? だとか、What would you say to going there by taxi? といったような、相手が気軽に NO と言えるような提案をしたということである。「タクシーで行く」というアイディアを差し出しているのはたしかだが、そのアイディアは未来指向とは言え、行為の遂行が想定されているとは言い難いものである。ゆえに、「行為と向き合う」という to 不定詞はフィットせずに、端的に「～すること」というアイディア(名詞概念)として差し出すために動名詞が選択されているのである。未来指向でも「行為と向き合う」のではなく、アイディア(名詞概念)として捉えるために動名詞を使う他の例として、consider などがある(e.g. Would you consider working for me?)

次に、She suggested (that) her husband quit drinking.等にみられる、that 節内の動詞の原形の用法は「仮定法現在」と呼ばれることがある。しかし、この原形は実のところ命令法の応用である。「まだやってないことをやれ」というコンテキストで原形を使うもので、主語は2人称以外の場合もあるが、命令法の領域で把握可能である。その命令法的な内容を命題として差し出すのが、suggest + that someone (should) do の構文である。「命令」というと、拒む余地はない、と考える向きもあるかもしれないが、これは文法上のタームであって、suggest の意味ではない。Suggest はあくまでも、「(拒まれるかもしれない)アイデアを差し出す」というのが本質の意味と考えられるのである。ちなみに、suggest に直説法(通常のテンスに従う)that 節が続く用法もある。そのとき、「示唆する(ほのめかす)」といった意味合いになるが、その場合も、「(相手に拒まれるかもしれない)アイデアを差し出す」という suggest のコアは活かされていると考えることができる(e.g. Are you suggesting that he's been telling a lie?)。

Suggest から展開する構文ネットワーク(タテとヨコ)

以下、suggest の構文展開(タテの構文の幅)で確認された各構文パターンを軸として、そこから構文を共有しながら動詞が異なるヨコの構文のつながりへと展開してみよう。

● suggest an idea to her ⇒ 「動詞 + A + to + B」構文

explain an idea to her

propose an idea to her

recommend an idea to her

● I suggested going there by taxi. ⇒ 「動詞 + ING」構文

I *considered going* there by taxi.

I *avoided going* there by taxi.

I can't *imagine going* there by taxi.

He *gave up going* out with her.

He *started going* out with her.

He *kept going* out with her.

He *stopped going* out with her.

He *resumed going* out with her.

● I suggested that he stop smoking. ⇒ 「動詞 + that + 主語 + 原形」構文

She *demanded that* her husband *stop* gambling.

The police *commanded that* they *move* away.

The landlady *insisted that* I *pay* the rent right away.

このように動詞構文をネットワーク化(タテとヨコを考慮)して捉えることによって、動詞構文の学びをより効果的なものにできるのではないか。個々の動詞の構文をバラバラに学ぶのとは違って、主要な動詞構文のパターンがいたるところで反復利用されていることへの気づきも高まるはずである。さらに、このことがひいては学習者の発話・理解・自動化等の局面にポジティブな影響をもたらすことも期待されるところである。

おわりに

動詞の構文を考えるにあたっては、ヨコの構文的な広がり(inter-verbal construction network)に加えて、タテの構文の幅(intra-verbal construction network)を抑える必要がある。後者の視点を徹底するには、動詞のコアを参照することが不可欠である。たしかに構文現象は、構文独自の意味が定着してその用法がネットワーク化していくことで生じると考えられる。しかし、そのようにネットワーク化する動詞構文も、主要なものについては、概して基本動詞の用法とつながっている。「二重目的語構文」と give、「結果構文」と make、「使役移動構文」と put (get)などが、その典型である。基本動詞 give を軸にみれば、「give + A + to + B」と「give + 名詞 + 名詞」が、重要な動詞構文のパターンとして生じ、構文独自のスキーマを定着させて、他の動詞群を受容しつつ、それぞれに固有の構文カテゴリーを形成していく。そこで例えば、suggest という動詞について、なぜ、「suggest + A + to + B」は成立する一方、「二重目的語」構文は受容されないのかが説明可能となるのである。その説明においては、構文独自の意味のみならず、動詞のコアが当該の動詞がある特定の構文に受容されるか否かの原理もしくは制約条件になっているというのが、本稿の論旨である。その意味で、動詞構文を学んでいく際にも、基本動詞とそのコアに注目することはやはり必要なのである。